理性

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
理性

【Ｎコード】
Ｎ４２３９Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
いつもは理性的な阪神ファンの職場の先輩。しかしこと野球になると。阪神ファンにはこうした人が今もかなり多いです。

第一章

理性

甲子園球場はだ。今日も興奮の坩堝にあった。
「勝てや！」
「打倒巨人！」
「絶対に勝てや！」
「今日こそはや！」
こうだ。口々に言ってだ。一塁側はおろか球場全体を黄色と黒で埋め尽くして応援をしていた。
そうして球場を揺れ動かしながらだ。彼等は試合を見るのだった。
しかしその試合はだ。彼等にとって無惨な結果であった。
よりによってだ。巨人に負けてしまったのだ。こうなっては。
「何で負けるんじゃ！」
「巨人に負けるとは何事じゃ！」
「アホ！ボケ！カス！」
「地獄に落ちろや！」
こうだ。口々に叫んでいた。
彼等は怒り狂っていた。誰がどう見てもだ。
甲子園は怒りの渦に包まれていた。その中にだ。
彼がいた。背広のまま球場に来てだ。それでビールを飲みながら叫んでいた。
「何でいつも負けるんや！」
彼はこう喚いていた。見れば細い吊り上がった眉に引き締まった細長い顔立ち、日に焼けた肌、高い鼻を持つ美男子である。顎は先が曲がっており短めである。目は一重で垂れている。黒髪を丁寧にセットしている。
背が高い。それに引き締まったいい身体をしている。その彼がであった。

喚いていた。それもかなり感情的にだ。
「わしが見たらいつもやろが！」
「えっ、先輩けれど」
ここでだ。隣にいるまだ高校生に見える若い子が言ってきた。彼もスーツだ。茶色がかった髪に女の子みたいな顔をしている。背は一七〇程で彼より十センチは低い。
「この前言ってたじゃないですか」
「何てや」
「先輩が応援に行くと阪神は絶対に勝つって」
「そやったか？」
「そうですよ。言ってましたよ」
「覚えてないな」
これが彼の返答だった。
「そんなことは」
「そうですか？」
「そや。それで田所君よ」
「はい」
「帰ろか」
こうだ。その後輩田所裕也に言うのであった。
「ここにおっても腹立つだけや」
「ヒーローインタヴューはじまりましたね」
「小笠原か。けったくそ悪い」
グラウンドのお立ち台を見てだ。顔を歪ませて言い捨てたのである。
「金で巨人に言った恥知らずだ」
「恥知らずですか」
「巨人に行く奴は全員そうじゃ」
ビールを飲みながら言うのであった。
「巨人は何や！」
「先輩の大嫌いな球団です」

「ちゃう、巨人は日本国民の敵や」
随分と大きなことを言う。
「この赤坂学にとってはまさに親の仇や」
「先輩のご両親お元気なんじゃ」
「親父もお袋も阪神ファンや」
関西ではよくあることだ。関西の殆どの人間が阪神ファンなのだ。
「爺さん婆さんも親戚も皆阪神や」
「巨人は？」
「そんな奴は一人もおらん」
まさに黒と黄色であった。
「おったら徹底的に再教育や」
「何か凄いですね」
「大体君はや」
学はだ。その裕也に香を向けてこんなことを言ってきた。
「確かソフトバンクファンやな」
「はい、そうです」
「何でそこなんや」
「昔南海でしたから」
随分昔の話である。

第二章

「それでなんです」
「そうか。それでやったか」
「ええ、阪神も嫌いじゃないですけれど」
「そやったらええ」
学はソフトバンクには極めて寛容な姿勢を見せた。
「巨人やなかったらな」
「若し巨人だったら僕どうなってました？」
「ここで巨人グッズに身を包ませてや」
ここは甲子園球場の一塁側だ。まさに阪神ファンにとってのメッカである。
「それでみなさーーーーん、最高ですかーーーーーっ！？って叫ばせとるわ」
「何か古いですね」
「そやけどこれやったら絶対に死ぬ」
学は断言した。
「巨人ファンは関西では一切の人権がないんやからな」
「特にここではですね」
「そういうことや。しかしほんま」
学は顔を歪ませてだ。忌々しげに言うのであった。
「けったくそ悪い。巨人が勝つなんてな」
「しかも逆転でしたね」
「巨人なんか一億年位最下位でええんや」
また大きなことを言う学だった。
「未来永劫な」
「一億年ですか」
「巨人は北朝鮮と同じや」
今度言う言葉はこれだった。

「日本人の敵やぞ」
「嫌いな人は多いですよね」
「巨人が負ければそれで日本人は元気になるんや」
主観全開の言葉をだ。ビールの匂いと共に吐き出す。
「その負ける惨めな姿を見てや」
「じゃあ勝ったら」
「こうなるんや」
こんなことを球場で言っていた。そしてだ。
彼はだ。さらにであった。
「ほなや」
「はい、飲みにですね」
「行くで、憂さ晴らしや」
裕也を連れてまた飲むのであった。この日彼は大荒れであった。
しかし次の日の職場では。彼は。
「わかりました。それでは」
「では行って来ます」
真面目に、かつてきぱきと働いていた。勤務は非常にいい。
有能かつ俊敏、鋭利であった。まるでサイボーグの様に動く。
しかも後輩への面倒見や教育もよかった。裕也にだ。
「いいか、ここはだ」
「こうすればいいんだ」
手取り足取り教えるのだった。しかも丁寧かつわかりやすくだ。
「これでできるな」
「はい、有り難うございます」
その教え方にだ。教えられる裕也も驚くことしきりだった。
「先輩のお陰でできます」
「いやいや、僕のお陰じゃない」
学はそれは否定する。そしてこう言うのである。
「田所君が努力してだよ」
「僕がですか」

「教えてもらいたいってことはできるようになりたいってことだ」
こう彼に言うのだ。
「そういうことだからね」
「だからですか」
「だから頑張るんだ」
また裕也に言うのだった。
「何かあったらまた僕に言ってきてくれ」
「できるようになりたいと思ったら」
「努力したいと思えばね」
こんな調子であった。本当に仕事では尊敬できる立派な人物であった。それは裕也から見てもそうだし上司や同僚からもそうであった。

第三章

そんな彼であった。しかし野球になるとだった。
朝職場でスポーツ新聞を見てだ。いきなり言うのであった。
「よし、城島やってくれたな」
「昨日打ったんですよね」
「それで勝った。いいことだ」
その端整な顔を頬笑まさせての言葉だった。
「やっぱり阪神は勝たないとな」
「そうですね。本当に」
「じゃあ今日は」
そしてだ。ここでだった。
「甲子園に行くか」
「今日もですね」
「聖地巡礼だ」
甲子園こそはだ。彼のメッカであった。
「阪神の輝かしい勝利を見に行こう」
「行ってらっしゃい」
「いやいや、君もだ」
裕也を誘うことも忘れなかった。
「君もだ。暇だろう？」
「それはそうですけれど」
裕也もそれは否定しなかった。目をしばたかせながら彼に答える。
「帰ってもゲームするだけですし」
「それならどうだ。阪神の勝ちをこの目で見るんだ」
「ソフトバンクじゃないんですね」
「パリーグはそれでいい」
とりあえず彼がソフトバンクファンなのはいいとするのだった。
やはり巨人以外には非常に寛容であった。

「しかしセリーグはだ」
「特に贔屓の球団ないですけれど」
「それだと阪神ファンになるんだ」
こう彼に言うのである。
「いいな、その為にだ」
「僕を連れて行くんですか」
「世界を黒と黄色で覆い尽くす」
それが学の望みであり夢だった。夢はかなり大きい。
「その為にだ。僕は布教しているんだ」
「阪神って宗教だったんですね」
「そうだ。そして敵はだ」
「巨人ですね」
「君は巨人ファンにだけはさせない」
彼は言い切った。
「絶対にだ」
「わかりました。じゃあ」
ここでだ。彼は内心ほっとしていた。今日の試合の相手は広島だ。巨人ではない。学は巨人以外に負けても極端には荒れないのである。
それでほっとしながらだ。彼について試合を観るのであった。
そうした日常であった。ペナント中は特に激しいがシーズンオフでもだ。学は何処までも恐るべき阪神ファンであり続けていた。
二月になるとだ。絶対にこう上司に申請するのであった。
「また行ってきます」
「またか」
「はい、またです」
もうこれでやり取りが成立するまでになっていた。
「キャンプに行ってきます」
「よし、わかった」
上司もこれで納得するのだった。そうしてだ。
有給休暇を取ってだ。阪神のキャンプ地に行く。そうして数日し

て帰ってきてこう言うのである。
「今年の阪神はいけるな」
「いけますか」
「新人の伸びがいい」
裕也に話すのである。彼に対してだけではないがだ。
「それにベテランも健在だ」
「それじゃあですか」
「今年こそは絶対に優勝だ」
断言さえするのであった。
「もうぶっちぎりでだ」
「そんなに仕上がりがいいんですか」
「そうだな。まあ今年は」
言いながらだ。選手名鑑や週刊ベースボールを出してあれこれ話すのであった。とにかく研究も欠かさない彼なのであった。
「百勝だな」
「随分派手に勝ちますね」
「今年の阪神ならいけるな」
キャンプを思い出しながら話すのだった。話をしながらお土産を出すのも忘れない。そうしながらさらに話をしているくのである。

第四章

「さあ、楽しみだ」
「そういえば今年のオフは」
「補強も上手くいった」
それへのチェックも怠ってはいない。
「ドラフトもよかったしな」
「特にピッチャーがですね」
「阪神はピッチャーのチームだからな」
ただしダイナマイト打線についても同時に言う。
「だから余計にな」
「いいんですね」
「完全なチームの完成だ」
ここでも断言であった。
「今こそ世界中が阪神の強さを知る時が来たんだ」
「じゃあシリーズで待ってますから」
裕也はこう先輩に返す。しかしであった。オープン戦がはじまると。
勝っても負けてもだった。彼は騒ぐのだった。
「まだまだだな」
「まだオープン戦ですよ」
「オープン戦を侮らないことだ」
また裕也に言うのである。
「ここで色々なことがわかるんだからな」
「仕上がり状況とかですね」
「優勝はオープン戦にこそかかっている」
彼は力説する。オープン戦からそうだ。
「だから。新人ももっとな」
「やっていけっていうんですか」

「そうだよ」
まさにその通りだというのである。
「ここはな」
「新人は大事ですけれどね」
こうは言ってもだった。学のあまりものトラキチぶりに辟易するものを感じる裕也だった。そしてそんなやり取りを続けている間にだった。
学は結婚した。お見合いである。その相手は。
「いやいや、性格もいいし顔もいい」
「いい人なんですね」
満面の笑顔で裕也に話すのだった。
「そういう人なんですね」
「そう。しかも」
学はここでさらにこう言ってきた。
「阪神ファンだしな」
「そこでまた野球ですか」
「ああ、これが一番大事だな」
ここでも阪神なのだった。
「やっぱりな」
「何か本当に阪神が第一なんですね」
「子供の名前ももう決めてある」
学の暴走はまだ続くのだった。
「名前は実な」
「実っていうと」
「阪神で、いやプロ野球で最高のピッチャーだよ」
村山実のことである。その背番号十一は永久欠番である。長嶋茂雄を修正のライバルとし常に果敢に立ち向かっていった男である。
「その人の名前にするよ」
「女の子だったらどうするんですか？」
「その場合はな」

その場合についても話す学だった。
「同じだよ」
「実でいけますか」
「一字はそれでいってもう一字は女房から貰う」
そうするというのである。
「それで二人で決めたよ」
「何か本当に虎尽くしですね」
「ああ、これからは一家全員で虎だ」
満面の笑顔のまま裕也に返すのだった。
「虎、虎、虎だよ」
「ううん、それはいいんですけれど」
そんな虎尽くしの学を見ながらだ。裕也はこう言うのであった。

第五章

「先輩、このまま阪神一直線なんですね」
「そうだよ、僕は生まれた時から決めてるんだ」
今度はにやりと笑って言うのであった。こう。
「この生涯をかけて。阪神を愛していくとね」
「何か凄いですね」
「ははは、まだまだ愛し足りないよ」
こんなことも言うのであった。
「阪神に対してね」
「そうなんですか」
「君も結婚してそんな家庭を築くんだ」
ようやく尊敬できる先輩に戻った。
「いいな、それは」
「ええ、そうします」
とりあえずこの言葉は素直に受けられる裕也であった。それはだった。
だがその彼もだ。ようやく交際し結婚が決まったが。その相手についてこう学に話す。場所はいつもの甲子園の一塁側である。
「彼女ですね」
「どうしたんや？」
試合が終わってだ。勝利の余韻の中で彼の話を聞く学だった。勿論酔っている。勝利のビールを飲みながら後輩の話を聞いている。裕也も喋り方が応援の時のそれになっている。
周りは黒と黄色が入り乱れている。歓声も凄い。勝った時の甲子園そのものだった。その中で二人は今話をしているのである。
「今度結婚するのは聞いとるけどな」
「あれですよ。パリーグファンで」
「それで何処や？」

「ロッテなんですよ、ロッテ」
忌々しげにだ。ビールを飲みながら話す彼だった。
「千葉生まれとかで。ロッテなんですよ」
「地元の球団やな」
「ええ。それで生まれた子供には兆治って名付けるって言って」
「あのマサカリ投法のかいな」
「そんなの許せませんよ」
裕也は断言した。
「やっぱり名前は忠ですよ、忠」
「南海のあの人やな」
「ええ、名投手にして南海時代の最後の監督、九州に来ての最初の監督ですよ」
そうした歴史的な意味でだ。ホークスにとってはかけがえのない人物である。もうこの世にはいないがそれでもなのであった。
「その人の名前にしたいのに」
「やれやれやな」
「先輩のところは結局あれですよね」
「男の子やった」
もう子供が生まれたのである。そしてその名前は。
「実にしたで」
「やっぱりそうなったんですか」
「そや。ええ名前やろ」
「そうですね。じゃあこっちも」
「忠かいな」
「その名前しかありませんよ。全く何で」
裕也が荒れてきていた。普段の彼とはまた違ってきていた。
「ロッテなんですか。やっぱりホークスですよ」
「やれやれやな」
その話を聞いてだ。学はついつい苦笑いになってこう言葉を出した。そしてだ。

「君も何だかんだで」
「何かあります？」
「野球になると人変わるな」
「そうですかね」
「結局僕と同じやな」
そして今度はこう言うのであった。
「そこはな。同じやな」
「そうだったんですか。はじめて気付きました」
「けどその通りや。君も野球になったら理性が飛ぶな」
「そんなつもりなかったんですけれど」
「けど実際にそうなっとるわ。まあ」
後輩にここで告げる言葉は。
「奥さんとはそれで喧嘩せんようにな」
「わかりました」
そう言われると頷くしかない裕也だった。彼はこれで納得した。自分もまた結局のところ学と同じで野球のことになると理性がなくなることに気付いたのだった。
そして彼の子供は。双子の男の子だった。それぞれの贔屓のチームの大投手の名前は一人ずつに名付けられた。これはいい結末だった。

理性　　完

２０１１・１・６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4239v/

理性

2011年8月2日03時28分発行